

巻頭言

名古屋学芸大学健康・栄養研究所
所長 下方 浩史

コロナ禍が始まってから3年が過ぎて、ようやく感染も下火になり始めました。コロナ禍は研究、教育に大きな障害となり、なかなか思ったような成果をあげられなかった研究者も多かったことと思います。しかし、研究者の皆さんのご協力で、今年も健康・栄養研究所年報の第14号を発刊することができました。

本誌は名古屋学芸大学健康・栄養研究所の研究や実践活動の成果発表の場であるとともに、その成果を広く社会に知っていただくために発刊を続けています。2009年から、本誌は医学中央雑誌データベースに定期刊行物として収録され、医中誌 Web でも検索できるようになっています。第14号では原著3編、総説2編、報告1編の計6編の論文を掲載しています。

原著では、「和食スコアと低骨密度率および60歳以上の骨密度との関連—10年間の国際比較研究」、「対面模擬栄養指導とオンライン模擬栄養指導におけるコミュニケーションとラポール形成の比較」、「健診受診者の年齢別、性別の体組成の検討」と、栄養疫学や栄養教育について貴重な研究成果が報告されています。総説では、「和食、減塩とSDGs」、「看護学生における食生態学的アセスメントの現状」と、減塩についての新しい考え方、食生態についての文献研究がまとめられています。報告では「HACCPの考え方に基づいた衛生管理の実践」の研修報告がまとめられています。

今年も、「栄養」と「食」に関する論文が多く集まりました。現代における疾病のほとんどは、生活習慣に起因する慢性疾患です。生活習慣の中でも健康に対してもっとも大きな影響をもたらすのは毎日の食事です。研究所からの研究成果や実践活動が、私たちの健康の維持増進に役立っていくことを願っています。